

# 令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【つばさ小学校】

⑥ 次年度への課題と授業改善策	
知識・技能	研修などの機会を通してデジタルコンテンツの有効な活用方法を共有し、今年度の授業改善策に引き続き取り組んでいく。また、今年度の全国学力・学習状況調査及びさいたま市学習状況調査の結果を踏まえ、定着率の低い(平均正答率50%以下を目安にする)学習内容・領域について、年度当初に全校で共有し、該当の学習を扱う際の指導改善に生かせるようにする。併せて、モジュール学習の充実を図っていく。
思考・判断・表現	研修などの機会を通して授業実践や教材を共有し、今年度の授業改善策に引き続き取り組んでいく。また、今年度の全国学力・学習状況調査及びさいたま市学習状況調査の結果を踏まえ、正答率の低い(平均正答率50%以下を目安にする)学習内容・領域について、年度当初に全校で共有し、各教科等・各単元等の指導改善に生かせるようにする。その際には、さいたま市学習状況調査解説資料の「特徴的な問題と解説」等を参照していく。

① 今年度の課題と授業改善策		
	学習上・指導上の課題	授業改善策【評価方法】
知識・技能	〈学習上の課題〉前学年以前の内容に関する問題の正答率が低い。 〈指導上の課題〉児童が既習事項を振り返ったり、反復や習熟に取り組む時間の設定が不十分である。	⇒ ・ドリルパーク等を活用し、現学年以前の内容も含め、漢字や基本的な計算等の反復・習熟に取り組む[月に2回以上の実施]。 ・系統性を意識した指導及び学習のために、「ドリルパーク」等を活用し、既習事項の定着状況やレディネスを確認する機会を設定する[学期に2回以上の実施]。
思考・判断・表現	〈学習上の課題〉国語の「B書くこと」の問題やその他の教科の文章表現型の問題で正答率が低い。自己の考えや表現についてメタ認知し、自己調整する力が弱い。 〈指導上の課題〉児童が自己の考え・表現について、評価基準や他者の考え・表現を参照しながら振り返り、見直す機会が不十分である。	⇒ ・問題解決型の学習過程や、ルーブリック等を活用した評価基準の共有化・明確化と振り返りを取り入れた授業を行う[学期に2回(単元)以上の実施]。 ・1人1台端末を活用した共同編集や他者参照の機会を設定し、協働的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるようにする[R6年度さいたま市学習状況調査「学級の友達との間で話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広げたりすることができるよすまか」の質問項目において、肯定的な回答の割合を前年度より向上させる]。

⑤ 評価(※)		調査結果 授業改善策の達成状況
知識・技能	C	今年度の取組み状況についての教職員アンケートでは、「現学年以前の内容も含めた漢字や基本的な計算等の反復・習熟の月に2回以上の実施」と「既習事項の定着状況やレディネスの確認の学期に2回以上の実施」について、実施できたという回答は5割程度であった。1学期末に行った前回調査より、両項目とも「(ほとんど)実施していない」の割合が減り、取組みに広がりが見られた。
思考・判断・表現	A	今年度の取組み状況についての教職員アンケートでは、「問題解決型の学習過程や、ルーブリック等を活用した評価基準の共有化・明確化と振り返りを取り入れた授業の学期に2回(単元)以上の実施」と「1人1台端末を活用した共同編集や他者参照の機会を設定した授業の実施」について、8割程度の教員が実施できたと回答した。1学期末に行った前回調査より、どちらも1割程度の向上が見られた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

② 全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語の漢字の問題で正答率がやや低いものがあった。4年と5年で学習する漢字について、どちらも同じくらいの割合で間違えた児童がいた。既習も含めて漢字の確実な定着を図るために、「ドリルパーク」等を活用しながら反復・習熟のための学習機会を確保していく必要がある。また、国語では、最後の二問の無解答率が高く、解答時間が足りなかったと回答した児童は36.5%いた。読書会会の充実など、読む力(速さ)を高めるための指導も必要であると考えます。
思考・判断・表現	国語と算数の両方で、記述式の問題に課題が見られた。解答類型を見ると、正答の条件2つのうち1つしか書いていないために不正解となる児童が多かった。各教科の学習における考えを文章に記述して表現させる活動では、ルーブリック等を活用した評価基準の共有化・明確化に取り組む、児童が「正答の条件」を意識して、解答したり自己評価や見直しをしたりすることができるようにする。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④ さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	6年は各教科で、平均正答率が市平均よりも大きく上回った。3~5年は各教科の平均正答率では、市平均よりもやや上回る結果となった。3~5年については、これまでの本校の調査結果と比べても、市平均より上回った分(本校平均正答率-市平均正答率)が、学年が下がるにつれて少なくなっている傾向がみられる。
思考・判断・表現	4年国語、5年国語・算数・社会、6年国語・算数・社会・理科で、平均正答率が市平均よりも大きく上回った。4年算数、5年理科では、市平均よりもやや上回る結果となった。一方、3年国語・算数は市平均よりもやや下回った。知識・技能と同様、これまでの本校の調査結果と比べても、学年が下がるにつれて市平均との差が縮まっている傾向がみられる。

③ 中間期報告		中間期見直し	
	評価(※)	授業改善策【評価方法】	
知識・技能	C	1学期の取組み状況についての教職員アンケートでは、「現学年以前の内容も含めた漢字や基本的な計算等の反復・習熟の月に2回以上の実施」と「既習事項の定着状況やレディネスの確認の学期に2回以上の実施」について、実施できたという回答が4~5割程度であった。	⇒ ・モジュール学習の時間を活用し、ドリルパークの活用を推進する。[評価方法については変更なし] ・「ドリルパーク」以外にも、教科書会社が作成するデジタルコンテンツにも既習事項やレディネスの確認ができるもの(「東京書籍」のMicrosoftFormsコンテンツなど)があるので、それらの活用方法を共有し、実施する。[評価方法については変更なし]
思考・判断・表現	B	1学期の取組み状況についての教職員アンケートでは、「問題解決型の学習過程や、ルーブリック等を活用した評価基準の共有化・明確化と振り返りを取り入れた授業の学期に2回(単元)以上の実施」と「1人1台端末を活用した共同編集や他者参照の機会を設定した授業の実施」について、7割程度の教員が実施できたと回答した。今後、さらに取組みを共有し、広めているようにする。	⇒ 変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)